国 内 実 態 調 査 報 告 書

テーマ　　：
ゼミ名　　：小田　悠生　ゼミ
調査日　　：2024 年 2 月 20 日（火）～2 月 23 日（金）
調査先　　：倉紡記念館、直島家プロジェクト、琴平町
授業科目名：ベーシック演習Ⅰ・Ⅱ
参加学生数：7 名（1 年生）

調査の趣旨（目的）

本ゼミでは、文化遺産や産業遺産の保存・活用と地域振興策、そのなかでの企業と地域社会の関わりについて、瀬戸内地方や離島の過疎問題を中心に文献を通じて１年間学んできた。実態調査では、岡山県倉敷市と倉敷紡績、香川県直島町とベネッセコーポレーション、四国４県が取り組む四国の巡礼地の世界遺産登録推進運動について調査を行うことを目的とした。

調査結果

倉敷ではまず、倉敷に現存する最古の建物である築 300 年の井上家住宅を訪れた。同家は約 400 年前に同地を干拓し、倉敷発展の礎を築いた一族である。第 17 代の現当主から、江戸時代に遡って、干拓地であり天領であるという特性を生かした倉敷発展の歴史の説明を受け、当時の商家の暮らしぶりや、個人が所有する文化遺産を現代に保存することの課題についてお話を伺った。つづいて、築約 200 年の大原本邸を訪れた。大原家は 18 世紀末に倉敷に進出した豪商であり、井上家のような江戸初期からの有力者が「旧録」と呼ばれたのに対して、「新録」と呼ばれた新興勢力であった。明治期になると、大原家は、干拓地という土壌を生かして倉敷で発達した綿花生産をもとに倉敷紡績という近代企業を創業する。倉敷には大原家や倉紡関連の施設が数多く残されている。その中でも、企業博物館である倉紡記念館を訪れ、さまざまな資料や生産機械などを閲覧しながら、明治期以来の産業発展や近代的企業のあゆみについての学びを深めた。

つづいて香川県直島で調査を行った。今日ではアートの島として世界的に知られる直島では、1980 年代までに精錬業の構造的不況・公害と過疎化が顕在化していた。直島北部は三菱マテリアルの製錬所が現在も稼働しており、直島の就業人口の 3 分の 1 は同社で働く。対照的に島南部は自然が豊かであることから、南部に観光客を誘致する計画が立てられた。しかし、当初計画されたリゾート開発は失敗に終わった。そこで、新たな構想をもとに、「文化」による地方創生を図ったのがベネッセである。ところが、当初はアートプロジェクトも、直島の町民とは乖離したものと受け止められ、必ずしも歓迎されたわけではない。より地域と密着したアートプロジェクトを展開する上で鍵となったのは、その場所の特性と強く結びつき、交換不可能なサイトスペシフィックなアート、そして住民参加型のプロジェクトである。実態調査では、民間住宅や診療所、コミュニティ施設を舞台に展開される「家プロジ

ェクト」を訪れ、アートと地域（住民）の記憶とがどのように結びついているのか、どのような点で住民参加が見出せるのか検討した。
最後に香川県琴平町で調査を行った。四国４県は、巡礼をキーワードに世界遺産の登録活動を展開している。古来、巡礼や参詣は観光と強く結びついており、本調査では琴平町の金比羅山を訪れた。昭和の末には、年間 500 万人を記録した同地への訪問客も、近年では約 250 万人まで半減しており、有名観光地と言えど、国内他地域や海外との激しい競争にさらされている。同町では、琴平のブランド化戦略、参道や街道の景観整備、インバウンド客誘致のため多言語化や参詣プラスアルファの体験型観光計画を進めており、これらの取り組みについて調査した。

大原本邸にて＿大原孫三郎の言葉

直島家プロジェクトの一つ住居参加型アート